

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 175, 2016

VIEW 展望

「何か言い忘れたことがあるんじゃないか？」映像の再構築に向けて／中島崇…2

INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…10 支部・研究会だより 東部支部…3
映像理論研究会…4 映画文献資料研究会…4,9 映像教育研究会…5 アナログメ
ディア研究会…6 映像表現研究会…9 関西支部…7-8 中部支部ショート
フィルム研究会…9

FORUM フォーラム

特定研究員公募のお知らせ…11 ショートショート フィルムフェスティバル &
アジア 大阪 2016…11

FROM THE EDITORS

編集後記…11

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 175 号」2016 年 7 月 1 日発行

発行人：武田潔 編集担当／総務委員会 [第 21 期]：相内啓司（委員長）・

鳥山正晴（副委員長）・伊藤高志・石坂健治・遠藤賢治・橋本英治

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

「何か言い忘れたことがあるんじゃないか？」 映像の再構築に向けて

中島 崇

酒場で飲んだ「バリ野郎」という聞き慣れない銘柄の焼酎が体に残っていたのでしょう、その晩見た夢にジャン・リュック・ゴダールが登場した。夢って恥ずかしいぐらい安直です。日本のどこかでゴダールを囲んで10名ほどの合宿のようなものに自分も参加している。ある朝食のテーブルで彼と隣合わせになり、付きっきりの通訳を通してゴダールは私にこう問いかけてきた。「何か言い忘れたことがあるんじゃないか？」と。さてな？

それから4ヶ月が経ったけれど思い当たる節がない。問いはどこか遺言めいているから（もちろん彼は健在だが）、安直ついでに日本の高齢者社会の問題について言及すれば何か浮き出てくるのかなど思ったりもする。

15年ほど前からうすうす気づいていたのだが、老人がだんだんつまらなくなってきた。その大きな要因の一つがテレビの台頭だと仮定すると、現在80歳あたりの後期高齢者を境目に、以後の世代は他人と「語る」努力を怠ってきたのである。高齢者が指標を示すという慣習があてにならなくなったことで、これから社会に出ようとする青年たちと同様に、近々高齢者の域に足を踏み入れる我々の世代にも一抹の不安を感じさせる。世の慣習に倣ってこれからは何も語らず、じっと居座っているべきか。それを嫌って表現者としてすべきことは何なのかを考えるべきなのか。

第二次世界大戦後の映像の歴史をざっと振り返ってみる。モダンからポストモダンへ、あるいは構造主義からポスト構造主義を経由して、1980年代以降は選択肢の一つとして再構築が謳われてきた。ところが日本では一向にこの概念が一般化せず作品にも反映されない。文字を書けばファウンドフッテージという用語が分かりにくいとの理由でつい最近までマスコミから抹殺され、一般劇映画を見れば途中まではとつような斬新な展開がありながらラストはくどい感傷に終始する。突破口が見えないのだ。再考でなく再構築であるから、もとの事柄からインスパイアするという性格上本来ここにはそのレベルを超えたナラティブが、論じる側にも制作する側にも存在すべきなのである。長年培ってきた「語り」の連鎖がいつの間にか今にも切れそうな細い糸になった現代社会で、果たしてそれは可能だろうか。

私事で恐縮だが、自分がなぜ再構築というテーマに沿って映像を作り始めたかについて少し語らせていただきたい。

以前は映像制作を学生に教える時に「電車の中で人の仕草を観察

しなさい」と口癖のように言っていたのだが、数年前にそれは間違っていると気がついた。前述したように「語り」のない世界を傍観したところであまり益がないと悟ったのだ。では何を参照にするか。それはかつて誰かが創作した作品自体で、私自身は映像よりもむしろ絵画やインスタレーションなどの展示物ではないかと直感したのである。実験的な映像作家に美術家が多いという事実に関連して、彼らがなぜ時間の創造物であるシングルチャンネル映像と茫洋な時間のなかに佇む展示物が創作上で両立できるかを知りたかったからである。

この問いに答えるべく印象深い展示の一例は、拙作『遙か白熱光』（2014）のヒントになった画家加茂昂の絵画展を観た時だった。夜間のビルの窓（のようなもの）を題材にした連作の絵画が自分の新作で考えているイメージに近いことに気づき、またその対面には顔にブラシをかけた何人かがアルプスを登山している別の連作が展示されている。場所もタイプも異なるこの二つの連作がどう繋がるのか、映画的に言うところのコンテニューティが寸断された瞬間の、秘めたエネルギーの存在をはからずとも知ることになった。映像創作では作者（私）はその空白を埋めるべく発想を得ようと頭をフル回転するが、おそらくは、観客も論者も同様の想像力が必要になってくるのではないだろうか。かつて、実験映画作家で美術家のブルース・コナーが「フィルム編集時の、0コマ何ミリのカットとカットの瞬間に命をかけている」としきりに強調していた意味がこの時初めて分かったような気がしたのである。

この私の映画のように概念が優先してソースが何かははっきりしない抽象的な形式、コナーのようなファウンドフッテージによる引用形式、意図的に模倣を企てる形式など再構築の手法や思想は多種多様だが、共通しているのは「語り」の活性化を促すことである。第一に、受動を能動にすり変えるということ。光と影は向こうからやって来るという物理学的な観念を覆すことになるのである。第二に、再構築に属する作品の利点は既知の事物が随所に散りばめられているから。それは言うまでもなく「語り合える」契機になりうるものである。

それにしても、（1960年代感覚でいうなら）ろくすっぽゴダール映画の研究をしていない畑違いの私の夢に舞い降りてきたゴダール氏は不幸だった。しかし時は否応無く進行している。不可解な問いのおかげで多くの事柄を想起できたことに私は感謝しなければならない。

（なかじま たかし／映像作家）

総務委員会

委員長 相内 啓司

今回は第 21 期総務委員会の最後の報告となります。

2016 年 5 月 28,29 日、第 42 回大会が、日本映画大学・白山キャンパスで盛況のうちに開催され、その中で第 43 回通常総会が無事成立しました。周知の通り通常総会に先立ち、役員改選選挙があり、その結果を受けて第 22 期の理事会が無事に承認されました。今後は武田潔会長を中心に新たな役員組織による学会運営がスタートします。

ここでは 21 期総務委員会の総括を簡単にしておきたいと思います。

第 21 期の総務委員会発足当時の課題とその対応の経過についてはおもに以下の 5 点に集約されます。

1: 学会運営についての財政的な立て直し。

これはおもに学会費が主たる財源である当学会において、ここ数年滞納される会員が一定程度あり、そのため学会運営のための財政的な破綻を生むという危機が数度あったということが背景にあります。学会運営を円滑に進めていくために、会費納入に関する会員の意識を高めることが緊急の課題となっていました。

そのため、具体策として会報等でその意識を高めていただくための理解を求めたり、銀行自動振込の導入、長きにわたって滞納されている会員を含め年間数回の督促をしてきました。その結果として多くの会員のご理解を得て財政状況はここ 3 年間の間にかなり改善されてきつつあります。しかしながら、まだ完全には未納分が回収されてはいません。

一方では、経費の削減と会員へのサービスの向上を兼ね備えるという形で、運営費の見直しの作業を進めてきました。『映像学』と『ICONICS』を統合し、学会誌としての水準を高めることを目的に紙面の充実を目指しながら経費の削減にも寄与しています。学会報についてはかつて年 4 回発行で紙媒体のみだったが、Web 版への移行を図り（1 回は紙媒体で発行）公開性を高めることに努めると同時に経費の削減にも力をつけてきました。

その他では印刷経費の軽減化を図り、また各委員会の会合を理事会に合わせ交通費等のスリム化を図るなど、地道な努力も続けています。

2: 学会運営に関連する契約関係の整備

会計報告に関連し、従来外部に委託する監査役との契約関係については書面をもって正式に交わすということが行われてこなかった経緯があるが、これを改善し正式に書類を持って契約する形に改められた。

さらに、事務関連業務に関しても、長年日本大学芸術学部事務所に無償で提供していただいていた経緯があるが、この点についても双方が正式に書面を持って確認し合う形に改められた。業務委託についても事務局員との契約を正式に書面を持って行う形に改めている。

3: 「研究会活動助成金」の継続と運営費の捻出、会計報告の義務化。

会員の研究活動の活性化を図るべく研究企画委員会の提案により発足した「研究会活動助成金」ですが、財政的には決して潤沢とは言えない状況の中、総務委員会の仕事としてその予算を確保してきました。併せて支給した研究会に対して研究会活動の報告と合わせて、会計報告を義務づけ、明朗かつ健全な運営がなされるように配慮してきました。各研究会活動も活発に行われ今後もますますの活性化が望まれます。

4: HP のリニューアル

HP のリニューアルとして、主な点はまず 3 点です。

第 1 に、文字情報が主体となっている当学会の HP でフォントの可読性の問題が指摘され、従来多用されていた明朝体に換えゴシック体に変更改善してきたこと。

第 2 にパソコン主体の形式であったことから、スマートフォンへ対応する表示の変換が可能な仕組みにした。

第 3 に HP への投稿規定を整備し、7 月中旬に HP 上で公開します。会員からの投稿については各支部での判断のもとに、支部をとおして投稿ができるシステムにしました。また各研究会からの投稿を可能とするよう整備を進めてきました。

5: 役員改選に関する選挙管理委員会の発足と運営

第 22 期役員改選にあたり、選挙管理委員会を発足させ、その運営にあたった。

以上、これをもって第 21 期総務委員会報告とします。

今後はさらなる学会の健全なる運営を進めていただけますよう、第 22 期総務委員会にその任をゆだねたいとおもいます。

会員各位のご協力、ご支援ありがとうございました。

以上

(あいうちけいじ/第 21 期総務委員長、京都精華大学芸術学部)

支部・研究会だより 東部支部

奥野 邦利

報告と計画について

一昨年度より東部支部では全国大会での総会終了後、同じ会場を借用した支部総会のスタイルを取りやめました。これは時間的制約や、形式的に会計報告のみであったこと、併せて各大会実行委員会には運営面で余分な負担を強いることになる状況を鑑みたものです。現在は東部支部所属の理事による幹事会において、会計報告、運営面での改善計画等を審議し、その内容の公正性を担保することとしました。

以下にその内容を報告します。

議事録

1：東部支部報告

*平成 23 年度より、会報の電磁化などの財政基盤が改善したことにより、東部支部では、研究発表費（約 40 万円）、運営費（約 40 万円）、合計（約 80 万円）の予算措置がなされるようになった。

*平成 27 年度決算では、研究発表費（¥146,932-）、支部運営費（¥3,132-）を支出した。

*例年の措置として、5 月 2 日に次年度繰越金（10 万円）を残し、これまで銀行口座に預金していた（¥674,032-）を学会総務へ返金した。

*平成 28 年度も研究費（約 40 万円）、運営費（約 40 万円）、前年度繰越金（10 万円）、合計（約 90 万円）の予算を計上している。

2：幹事会の設置について

*幹事会は規約上、理事のうち東部支部所属の者によって構成されていたが、支部活動の活性化を促す意味で、東部支部所属の研究会代表者にも幹事に加わってもらえるよう検討している。これについては、できるだけ速やかに幹事会規約を改正し、新たな体制作りに努める。

3：研究費について

*幹事会では、研究企画委員会と連携を取りながら、研究活動の振興及び新たな研究会の発足に努める。

*同じく幹事会では、東部支部研究会の使用項目や使用限度額等の運用方法を必要に応じて検討し、それを明文化する。

4：運営費の使用方法について

*運営費については、無理に予算消化する必要はなく、これを柔軟に使用し、残金は年度ごとに学会本部へ返金する。

*東北、北海道地区への活動補助については、引き続き検討をする。

尚、今年度も支部活動（講演及びシンポジウム）として東部支部講演会を企画します。これについては、講演内容が決まり次第、学会 ML などでお知らせします。

また、支部活動の際には東部支部所属会員のみなさんとの意見交換に努めますので、どうぞ足をお運びください。

以上

(おくのくにとし/第 21 期東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部)

Image Arts and Sciences 175 (2016) , 4

支部・研究会だより
映像理論研究会

木村 建哉

活動報告

遅ればせながら、2014年度と2015年度の東部支部映像理論研究会の活動内容を報告します。

2014年度第1回(通算第19回)研究会

日時:2014年5月17日(土)15:00-18:30

場所:成城大学7号館2階722教室

発表者及び論題:

木下耕介(群馬県立女子大学)「映像の人称を再考する——FPS、GoPro、
ファウンド・フッテージ、そして『湖中の女』——」

中村秀之(立教大学)「ドゥルーズは『シネマ』で何をやったのか——
映画的思考の思惟学(ノオロジー)について——」

30名を超える会員を中心とした来聴者があり、充実した発表(発表
要旨については学会ウェブサイトの「研究会」ページを御参照下さい)
と長時間(各発表者ごとに約30分)に及ぶ活発な質疑応答が行われま
した。

2015年度第1回(通算第20回)研究会

公開インタビューセッション「濱口竜介監督に訊く:映画の演技の演出
とは何か、それは理論化出来るか」

日時:2016年2月21日(日)16:00-18:30

場所:成城大学731教室

話し手:濱口竜介(映画監督、『ハッピーアワー』『親密さ』『PASSION』等)
オーガナイザー・司会進行:木村建哉(成城大学)

聞き手:小河原あや(成城大学、エリック・ロメールを中心としたヌーヴェ
ルヴァーグ研究)、角井誠(早稲田大学、ジャン・ルノワールの俳優演
出研究)

当日は一般来聴者が多く、来聴者100名を超える大盛況となりました。
1時間半ほどのインタビューセッションの後に、質疑応答に移りまし
たが、学会員からの質問と一般来聴者とのものを併せて1時間を超える白
熱したものとなりました。

理論と実作の間を架橋しようという、映像理論研究会としては初の試
みでしたが、一定の成果を収めることができたと言って良いのではない
でしょうか。今後も、同種の試みを一定の頻度で続けていく可能性を検
討したいと考えます。

(きむら たつや/映像理論研究会代表、成城大学文学部)

Image Arts and Sciences 175 (2016) , 4

支部・研究会だより
映画文献資料研究会

西村 安弘

今年度から映画文献資料研究会の代表を、日本大学の田島良一会員か
ら引き継ぐこととなった。これを契機に運営構成員のメンバーも若返り
をはかり、今回勇退されることとなった小笠原隆夫会員の代わりに、紙
屋牧子会員と上田学会員の参画をご快諾いただいた。(入江良郎会員は
継続。)

小笠原会員を初代代表とする映画文献資料研究会の発足主旨は、筑摩
書房から刊行されていた『季刊リュミーエル』第5号(1986年秋号)
の紙面上、小笠原会員の「戦後日本映画の諸問題 一九四五年八月十五
日とそれ以後の変化(下)」の下段に、「映画資料文献研究会のお知らせ」
の告知として掲載されている。

「一九四〇年代(敗戦の昭和二十年八月十五日を中心に前後十年間)
の映画の資料文献総目録の作成を企画して、目下単行本と雑誌の総目録
づくりのアウトラインを描き終えた段階です。/今後、文献資料を直接
調査、主要なものにはコメントを附して、目録の作製にかかるのです
が、この制作の意図に御賛同のうえ、制作に御協力願える方を募集いた
しております。」(同書107頁。)

連絡先としては、日本大学芸術学部映画学科内、日本映像学会事務局
の名前が記され、研究会の当初の目的は、映画研究の基礎となる文献資
料(とりわけ敗戦を挟んだ十年間)の整理だったことが伺える。「映画
資料文献研究会」が「映画文献資料研究会」と変更された時期は不明だが、
初期の活動の一環として、塚田嘉信氏が在野の映画研究者・資料収集家
に聞き書きを実施したことも見逃せないだろう。

その後、映像学会員の映画史研究に関わる発表の場としての役割を担
い、1997年7月に牧野守会員による第1回研究会「戦時下における映
画理論家の言説 今村太平と大熊信行のスタンス」が開催されてから、
本年3月の第39回「プロデューサー加賀四郎と『舗道の囁き』(1936)」
まで、凡そ20年の歳月の間にほぼ年2回のペースで運営されてきた。
本研究会の特徴としては、会員のみならず、広く在野の映画史家(本地
陽彦、最上敏信、梶田章、山口博哉等の各氏)をゲスト・スピーカーと
して招聘し、彼らの研究成果を紹介したことが挙げられよう。

この20年間に数多くの映画関連資料が復刻され、若手研究者がそう
した貴重な資料に容易にアクセスできる時代となった。国会図書館など
で進められているペーパー資料のデジタル・データ化は、やがてインター
ネットを通じて自宅にいながらにしての調査も可能にして行くことだろ
う。その反面、映画研究の1次資料であるフィルムへのアクセスは、今
後段々と難しくなっていくことが予想され、映画文献資料研究会のあり
方も、再考を迫られているようにも思われる。当面は、大学院生などの
若手会員の映画史に関わる発表を積極的に受け容れつつ、年2回の例会
開催をノルマとして自らに課すことにしたい。

(にしむら やすひろ/映画文献資料研究会代表、東京工芸大学芸術学部)

支部・研究会だより 映像教育研究会

難波 阿丹

報告と計画について

本研究会は、国内外の映像研究者／教育者を招いて、講演会およびワークショップの実施にひきつづき、聴衆の積極的な参加を重視したディスカッションを行うことを企画している。なかでも映像の教育学＝「pedagogy (ペダゴジー)」に特化して、シラバスの書き方、映像作品を授業中にどのように見せていくか、日本映画史の教材の選定、および、映画・アニメーションを題材に卒論を書く学生への必読文献リストの提示など、映像教育を実践するうえで心得ておくべきノウハウを共有することを目的とした活動をおこなう。映像の理論・美学・歴史の教育方法の共有をめざし、5月21日(土)に慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎において、D.A. ミラー氏(カリフォルニア大学パークレー校)の講演会の後に、第一回公開研究会として「映画教育と人文学ーヒッチコックを中心にー」と題するラウンドテーブル・ディスカッションを実施した。



今回のイベントの主催者である佐藤元状氏(慶応大学、東部支部)の司会のもと、D.A. ミラー氏、木下千花氏(京都大学、映像教育研究会代表、東部支部)、仁井田千絵氏(早稲田大学、東部支部)、吉本光宏氏(早稲田大学)が、自身の欧米と日本での映像教育経験を共有し、映画理論の講義形式や演習内容で問題と認識している点を共有した。

はじめに、木下氏が、自身の米国での映画教育経験をもとに、映像教育研究会のキックオフミーティングとして日米の比較を通じた映像教育の問題点を発議した。これを受けて、映画理論、映画史、メディア論の高等教育にかんして、日米では学術的背景に相違があり、日本の映像教育ではカリキュラムの組み方が、学部上の制度上の制約や、講義者それぞれの意図に任されており、一定のコンセンサスを得られていない点などが議論された。

これに対してミラー氏は少人数でのセミナー形式での講義や、大人数での講義の実例などをあげて応答し、加えてヒッチコック映画を映画教育に用いる可能性にも言及し、どのような順番でヒッチコックの作品群を学部生に紹介するかなど、具体的な教育の問題についても見解を述べた。その後も、会場との質疑応答の中で、人文学の広い文脈から

映画教育をとらえる必要性や、デジタルメディアを教育の現場に取り入れる可能性などが討議の対象となった。

映像教育研究会の今後の活動としては、下記の二つの計画を予定している。第一に、日本語と英語によるシラバス案および教育上の工夫を共有するための機会の提供、第二に映像教育をテーマとしたワークショップや講演会の企画・実施である。

第一の計画については、今後も公開、非公開の研究会を運営することで、学部生を対象とした日本語と英語でのシラバスの作成方法や、教育実践などの情報交換の場をもうけていきたい。そのうえで可能であれば、各教育機関のWEBサイトなどにリンクをはり、映像教育に関するシラバスをアーカイブ化することやデジタルメディアを用いた教育実践の具体的な工夫などの情報を公開することをめざしていく。

第二の計画については、今後も年度内に二回のシンポジウムおよびワークショップの実施をめざし、国内外で映像教育に携わっている有識者を招いた、講演会およびワークショップを企画したいと考えている。第一回公開研究会では、D.A. ミラー氏という国外の有識者を招いて人文学の幅広い文脈から日米の映画教育の比較や教育実践の実例について議論を深めたため、第二回公開研究会では日本の大学で持続的に映像を学部生、院生に教えている講師をゲストとして招き、日本の大学での映像教育の具体的な側面や問題点をテーマとしてとりあげていく。さらに、取り上げる映像作品に合わせた授業計画の比較など、具体的な題目を決めて、日本の大学で映像を勉強し研究指導を受けた若手の研究者を中心に3-4名のパネリストを選び、それぞれの多様な背景と教育実践を紹介していただき、意見や情報を共有するワークショップを行いたい。以上のような試みによって、個々の映像教育実践における共通認識を深め、映像研究者、メディア研究者、映像実作者のゆるやかな連携をつくりあげていくことを目標とする。

本研究会の活動が実績を重ね、広範なバックグラウンドを持つ会員の参加を得られるようになれば、映像の研究者のみならず、制作者をめざす学生のためのペダゴジーをどう組織していくかというような、プロダクションを取り入れた教育実践への応用も射程にあげられる。ほかにも、映像アーカイブ、博物館・美術館、さらには大学でのアウトリーチ活動などにもスコープを広げてゆきたいと考えている。映像教育研究会の今後の目標とは、このように、日本における映像教育および映画／アニメーションに関する大学教育の歴史、さらに海外での映像教育の紹介・検討にとどまらず、多様な背景をもつ会員を巻き込んだ映像教育をめぐるゆるやかな情報共有の場を提供することである。

(なんば あんに／映像教育研究会運営構成員、
上智大学グローバル教育センター)

Image Arts and Sciences 175 (2016) , 6

支部・研究会だより アナログメディア研究会

西村 智弘

【活動報告】

●「35 mm film で上映——実験映画、実験アニメーション」

日本映画大学で開催された「日本映像学会第 42 回全国大会」の 2 日目にあたる 5 月 29 日（日曜日）、H 202 教室にて「35 mm film で上映——実験映画、実験アニメーション」と題した上映会を行った。作品は以下の三本で、タイトルにもあるとおりすべて 35 ミリフィルムによる上映である。

アラン・エスカル『浮世物語』（2001）

プロデューサー：水由章、撮影：浜口文幸

「IMAGIKA2002」グランプリなど受賞多数

宮崎淳『FRONTIER』（2003）

2004 年の「カンヌ国際映画祭」監督週間で上映

辻直之『3つの雲』（2005）

2005 年の「カンヌ国際映画祭」監督週間で上映

35mm filmで上映
5月29日(日曜日)15時30分~16時40分H202 教室

アナログメディア研究会
日本映像学会第42回全国大会 @ 日本映画大学

実験映画、
実験アニメーション

上巻作品
『浮世物語』
アラン・エスカル 24分
『FRONTIER』
宮崎淳 23分
『3つの雲』
辻直之 13分
合計60分
上映後に作家、
関係者のトークあり

少数ながら三十五ミリフィルムで作られた、実験的な映画がありました。カンヌ国際映画祭やロッテルダム国際映画祭などで上映または受賞し、高い評価を得た作品を、三十五ミリフィルムで上映する希少な機会です。

主催：日本映像学会アナログメディア研究会
https://www.facebook.com/analogmedia
日本映像学会第42回全国大会についてはホームページで確認下さい。
http://nasas.jp/conference/news_conf/2016main

日本において 35 ミリで実験映画が制作されることはほとんどなく、貴重な上映になったといえるであろう。アナログメディア研究会では、日本映像学会の大会で毎回フィルム上映会を行ってきたが、自分たちで 35 ミリ映写機をもちこんで上映するのは初めてである。この無謀な試みを受け入れてくれた日本映画大学には深く感謝したい。

そもそものきっかけは、水由章会員からアラン・エスカルの『浮世物語』

を上映する案が提示されたことにある。なぜ『浮世物語』であったかといえば、この作品の撮影を故・浜口文幸氏が務めていたからであった。浜口氏は、日本映画大学が設立される時に尽力された方である。会場が日本映画大学であるのなら、この作品を上映するのがふさわしいのではないかということになった。

『浮世物語』には 35 ミリフィルム・ヴァージョンがあり、どうせ上映するならば 35 ミリでできないかという話になった。また、35 ミリによる作品として、宮崎淳氏の実験映画と辻直之氏のアニメーションが候補にあがった。35 ミリ映写機は、フィルムセンターに勤務する石川亮氏が個人的に所有しているものを借り、映写も担当してもらうことになった。

事前に試写を行い、会場でテスト上映も行って、万全の態勢で臨んだはずだったが、前日の準備段階でとつぜん映写機が動かなくなるというトラブルが発生した。石川氏はあちこちに電話をかけて映写機を直そうと努力したものの、どうやら映写機が完全にいかれてしまったらしい。かなり古い映写機であったので、故障するのは仕方がないことである。そのため、急ぎよ石川氏の知人から映写機を借り、無事に映写を行うことができた。上映後には、水由、宮崎らのトークを行った。

当日は、使えなくなった映写機を会場の外に出し、そこに会場の場所を示す紙を貼り付けて、いわば看板替わりに使った。それが功を奏したのか、いつも学会の大会で上映を行うよりも多くの観客が集まった。初めての 35 ミリ上映会はなんとか成功したといえそうだ。

【活動計画】

①「映画以内、映画以降、映画周辺」

映画監督の七里圭との共同企画で、実験映画の上映と座談会を行うというもの。実験映画と美術との関係を検証する内容を計画している。会場は阿佐ヶ谷美術専門学校、今年の 9 月あたりで行う予定である。

②「ヒカルオンナ Vol.2 日本・アメリカの現在の女性作家特集」（仮称）

昨年 UPLINK で開催した「ヒカルオンナ」の続編にあたる上映会である。前回はヨーロッパと日本の女性作家による実験映画を集めたが、今回はアメリカと日本の女性作家の実験映画を集める。時期は未定である。

③「奥山順市・札幌上映会」

実験映画作家の奥山順市の特集上映を札幌で行う。日程、会場などは未定である。

協力事業としては、「武蔵野はらっぱ祭り」のフィルム・インスタレーション展示とワークショップ、「阿佐ヶ谷アートストリート」におけるフィルム上映などが予定されている。

以上

(にしむら ともひろ／アナログメディア研究会代表)

支部・研究会だより 関西支部

中村 聡史

関西支部では去る平成28年5月14日(土)に花園大学にて福原正行会員のお世話により、下記のとおり関西支部第78回研究会を開催いたしましたので内容を報告いたします。

※発表内容についてはそれぞれの発表者が執筆したものを掲載しております。

日時：平成28年5月14日(土)午後2時より
会場：花園大学 拈花館

研究発表1：痙攣する「白いボディコンスーツの秘書」——押井守監督『トーキング・ヘッド』(1992年)にみる俳優とアニメーション・キャラクター、それぞれの身体の描写

発表者：関西学院大学 松野敬文会員

発表内容：

『トーキング・ヘッド』(1992年)は、押井守監督3作目の実写映画である。長編劇場アニメ『トーキング・ヘッド』の制作途中で失踪した監督、丸輪零の代役として雇われた〈私〉(声優の千葉繁が演じる)がアニメ制作スタジオ内で発生する連続殺人事件に巻き込まれる、という内容の同作では、3本の短編アニメ——セル・アニメの「劇中アニメ大作」、線画アニメの「作画監督大塚伸一の告白」と「シオタ駅の到着」——が劇中劇として挿入される。

作家自身は「映画を撮るという行為によって、逆に現実が一瞬にして〈映画〉に変貌する瞬間(押井守『絵コンテ集』、134頁)をとらえなかった、と語る本作は、主にその「物語批判とメタフィクションのスタイル」(上野俊哉「作家もジャンルも投げ捨てろ」『押井守全仕事』、124頁)において、賞賛を受けてきた。だが、先行研究は主に、四方田犬彦らの映画論から引用された幻惑的なダイアログの分析に終始しており、フィルムそのものに対する検討は、これまで十分になされてはこなかった。しかしながら、本作の芸術的独自性は、ダイアログにではなく、千葉ら役者の演技と、アニメ・キャラクターの演技とを並列的に取り扱う、演出手法にこそあるのではない。

本発表は、以上のような問題提起から出発し、『トーキング・ヘッド』を特に、俳優とアニメ・キャラクターの身体、それぞれの描写上の違いに注目しながら読み解いていく。例えば、アニメ映画の初号試写を終えた〈私〉が、プロデューサー・鶴之山の待つ車内へと歩みを進めていくショット(シーン2、カット1)では、車内の横に、秘書の女性が立っている。「ヘッドライトを点滅させて／待ち受けている下品なアメ車／白いボディコンスーツの秘書／SMOKEあり」(『絵コンテ集』、4頁)と記されたこの場面では、秘書はその身体を小刻みに痙攣させて、今にも倒れそうな様子をみせる(本発表では、痙攣という言葉で「静止していない」という意味で用いた)。秘書のこの痙攣を役者の演技力不足、撮影上の瑕疵と受け取ることも可能であろう。しかし同時に、痙攣する身体というモチーフは線画アニメ「作画監督大塚伸一の告白」(シーン25)のなかにおいて、繰り返されるものである。同シーケンスの冒頭では、「ブヨブヨくり返し」の線がしだいに作画監督・大塚の「シンプルなキャラクター」に変貌していく。大塚は押井自身によるアニメ・キャラクター論ともとれる長口上を述べながら、その身体を「ブヨブヨくり返し」(『絵コンテ集』、128頁)、痙攣させ続ける。そしてまた、3名のアニメーターによる襲撃を受けた〈私〉が「写真銃」で応戦する場面(シーン28)では、「突撃する3人」の様子が「つかえ棒」を使用した「活人画」(『絵コンテ集』、78頁)として描かれる。そこで「活人画」を演じるアニメーターたちは、秘書や作画監督と同様に、その身体を震わせている。加えて、映画の終盤、『トーキング・ヘッド』の物語は過労によって入院した監督、丸輪零が見た夢であったことが明らかになる。劇中の世界が夢である、ということを示すため、押井は病院アナ

ウンスの混入等様々な手法を試す。なかでも特筆に価するのは、役者による台詞のとりをわざと残す編集である。例えば、秘書のショットから続く〈私〉と鶴之山の会話場面で、プロデューサーを演じる俳優は「劣悪なスケジュールをものともせず」という台詞のあと、不自然な間を置いて「納期までに必ず初号を……」と続ける。本作において、実写・アニメ部分を問わず頻出する登場人物の痙攣は、現実と虚構のあいだを揺れ動く映画そのものの痙攣、不確実性を予告し、補強するものなのだ。

以上のような検討をもとにして、本発表が提示する結論は、以下の通りである。現実と夢、実写とアニメといった2分法を提示した上で、自らはその2項対立のどちらにも与せず、結論を提示しないこと。あるいは、判断を留保することの豊かさを示すこと。それが、押井守の映画作家としての独自性である。『トーキング・ヘッド』は押井のそうした傾向がもっともよくあらわれている作品のひとつとして、再評価の必要があるだろう。(松野敬文会員)

研究発表2：日本映画と「読み手」の論理——溝口健二映画を中心に

発表者：国際日本文化研究センター技術補佐員 長門洋平会員

発表内容：

わが国における映画学／映画批評の方法論は多岐にわたるが、本発表では「表層批評」や「テキスト分析」といった概念を軸にその現在性を再考した。映画を「読む」ことの創造性と実証主義はどのように関係するか、作品を「作る」のは作者なのか観客なのか、といった大きな問題を念頭におきつつ、具体的には溝口健二映画を例に、あり得べき「読み手」の可能性について検討した。

本発表では「テキスト分析」を、「イメージの裏側に隠されている(かもしれない)もの——例えば「ストーリー」や「作家の意図」——を説明する行為ではなく、イメージの表面＝テキストそれ自体に意識を集中させるなかで、読み手がそこから意味を構成していく分析的方法論」と定義し、そういった方法論と宮川淳や蓮實重彦らの議論との関係性を整理した。そのうえで、テキスト分析の問題点を次のように提示した。

- ①テキストを取り巻く文脈(コンテキスト)が欠落する傾向にある。
- ②「実証的」な手続きをとることを避けるために、原理的に「正解」が存在しない。それはそれでいいとしても、観客の数だけその成果は多様であるとなると、テキスト分析は学問として成立するのだろうか。
- ③表層への固執が、観客の物語論的な認知過程を排除(軽視)する傾向にある。端的には、映画における「ストーリー」の無視。

以上の見解を示したうえで、構造主義、精神分析、記号論を含むいわゆるフランス現代思想のコンテキストにおいて唱えられた「作者の死」(罗兰・バルト)を議論の俎上にのせ、その現代的なアクチュアリティに関する問題提起をおこなった。また1980年代以降の日本における「ポストモダン」の潮流を概観するなかで、テキストの「裏側」「外側」に対して多角的・複合的アプローチをとることの妥当性を検証した。

本発表後半では、『残菊物語』(溝口健二、1939)を例にとり、テキスト分析と実証主義とを連動させる方法論の可能性に関する議論をおこなった。発表者はかつて、『残菊物語』終盤の菊之助(花柳章太郎)とお徳(森赫子)の最後の対話シーンを分析する際に、フレーム外からは何も聞こえてこないこの場面において、実は物語世界においては「船乗り込み」の囃子の音が聞こえているかもしれないという可能性を検討するために、実際の大阪の地理を参照した(『映画音響論』みすず書房、2014年)。その方法に対する批判を参照しつつ、ジュネットやボードウェルらによるナラトロジーを援用するテキスト分析的思考法といわゆる実証主義的な議論は必ずしも対立するものではないという立場を示した。最終的に提起された問題点・課題は次のようなものである。すなわち、

作品（映画）において、まず存在するのはつねに表層である、という考え方は正しいが、分析プロセスから物語を排除する必要はないし、できない。ならば、テキスト分析的な立場においても「プロット」や「ストーリー」といった用語を論理的に正当な仕方を用いる方法が模索されるべきではないか。あるいは、物語論に依拠しないのであれば、とりわけ映画の音（音楽）研究において、物語世界／物語世界の二分法に代替される論理的枠組みが考案され、吟味される必要がある。（長門洋平会員）



以上2件ともにきわめて個人的に興味深い観点からの発表であり、それぞれに関して活発な質疑応答が交わされ、非常に有意義な研究会となりました。

今後の予定といたしますは、平成28年11月末から12月初旬に大阪大学にて第79回研究会を、平成29年3月に京都工芸繊維大学にて第80回研究会、同5月に第81回研究会の開催を予定しております。詳細については次号以降報告いたします。

また、関西支部で例年開催しております夏期ゼミナールを今年も下記のとおり開催いたします。非会員の方の参加が多い催しであり、一般に開かれた幅広い意見交換ができる場でありますので、会員のみならずはぜひともご参加いただければとお願い申し上げます。

（なかむら さとし／第21期関西支部担当常任理事、関西学院大学）



日本映像学会関西支部
第38回夏期映画ゼミナール 2016年

加藤泰特集 生誕100年

主催：日本映像学会関西支部・京都府京都文化博物館
日本映像学会研究活動助成費対象研究

9月2日（金）

午後1：30～ 開会の辞

午後1：40～ 午後3：10

『風と女と旅鴉』 1958年 90分 東映京都

午後3：30～ 午後4：56

『大江戸の俠児』 1960年 86分 東映京都

午後5：15～ 午後6：55

『阿部一族』(熊谷久虎監督) 1938年 105分 東宝

9月3日（土）

午後1：30～ 午後2：53

『醜の母』 1962年 83分 東映京都

午後3：20～ 午後4：44

『丹下左膳餘話 百萬両の壺』(山中貞雄監督) 1935年 84分 日活

午後5：10～ 午後6：31

『素浪人罷通る』(伊藤大輔監督) 1947年 81分 大映(京都)

9月4日（日）

午前10：30～午後0：09

『幕末残酷物語』 1964年 99分 東映京都

午後1：30～ 午後3：10

『緋牡丹博徒お竜参上』 1970年 100分 東映京都

午後3：30～ 午後6：00

シンポジウム

パネリスト：山根貞男（映画批評家）～～交渉中

パネリスト：井川徳道（映画美術監督）～～交渉中

パネリスト：石原昭（映画美術監督）～～交渉中

パネリスト：北浦寛之（日本映像学会会員、国際日本文化研究センター助教）

司会進行：小川順子（日本映像学会会員、中部大学准教授）

午後6：00～午後6：10 閉会の辞

会場：京都市中京区三条高倉町 京都文化博物館

TEL075(222)0888 FAX075(222)0889

<http://www.bunpaku.or.jp>

[交通機関]

○地下鉄「烏丸御池駅」下車、5番出口から三条通を東へ徒歩約3分

○阪急「烏丸駅」下車、16番出口から高倉通を北へ徒歩約7分

○京阪「三条駅」下車、6番出口から三条通を西へ徒歩約15分

○J R・近鉄「京都駅」から地下鉄へ

○市バス「堺町御池」下車、徒歩約2分

参加費：一般、学生ともに1日500円

(※当日券でその日限り出入り自由)

学会会員は、1階にて入館券(500円)をお買い求めの上、3階フィルムシアター 受付へお越しください。

問合せ先：〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山469 大阪芸術大学映像学科内

日本映像学会関西支部事務局（遠藤・大橋）宛

TEL 0721(93)3781 内線:3327 FAX 0721(93)6396

Mail : eizou@osaka-geidai.ac.jp

※参加希望の日本映像学会会員は8月31日までに予め関西支部事務局へメールか電話連絡をください。

以上

支部・研究会だより 中部支部 ショートフィルム研究会

林 緑子・伊藤仁美

ショートフィルム研究会は、2016年度これまでに、下記1件を開催致しました。

第15回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video」第1回

期日 2016年5月15日(日) 15:00-17:30

内容 作家プレゼンテーション、ディスカッション、交流会

会場 シアターカフェ

来場者数 12名

企画 伊藤仁美

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

■開催内容

I. 参加作家プレゼンテーション

伊藤仁美 (映像作品)

ないとうみさこ (アニメーション)

鈴木智捺 (アニメーション)

さとうゆか (アニメーション、コマ撮り)

竹末侑加莉 (実写+アニメーション)

加藤千晶 (実写)

VIVITAREO (実験アニメーション)

II. フリートーク & 交流タイム

参加作家7名・見学者5名

60分程度



作家プレゼンテーション終了後、見学者の方を交えてフリートークを行いました。フリートークでは、「作家の定義」について各々が感じている作家としての在り方や、作品制作に対する姿勢をお話いただきました。今回の交流会では学生の方も多く、様々な立場の作家が集まる機会となりました。(報告：伊藤仁美)

(はやしみどりこ/ショートフィルム研究会代表、
いとう まさみ/ショートフィルム研究会運営構成員)

支部・研究会だより 映像表現研究会

奥野 邦利・伊奈 新祐

今年も前年度開催く ISMIE2015 >の各校代表作から、推薦教員による投票によって7作品がセレクト集作品として選抜されました。参加各校への配布用ディスクについては、作成次第お配りする予定です。

以下、4票以上の得票があった選抜7作品のリストです。

『おつかれさんでした』(滝島慧子：イメージフォーラム映像研究所)

『涙 TV』(村田佑樹：北海道教育大学)

『しいれめ』(森あおい：名古屋学芸大学)

『pureness』(遠藤萌美：阿佐ヶ谷美術専門学校 映像メディア科)

『FREAKY!!!』(橋本詩織：尚美学園大学 芸術情報学部)

『Landscape Ijirako ~ Nagaragawa』

(杉山雄哉(代表)：情報科学芸術大学院大学 [IAMAS])

『Stereo』(遠藤真一：東北芸術工科大学 映像学科)

尚、セレクト集作成に参加した作品は、YouTubeでISMIE2015と検索してご覧いただけます。

また、今年度もISMIE2016の開催を予定しています。7月後半を目処に、募集要項を関係各校に送信しますので、新たに参加意思をお持ちの場合は、以下の連絡先にご一報ください。

ISMIE2016 事務局

日本大学芸術学部映画学科

担当：奥野邦利/野村建太

e-mail：okuno.kunitoshi@nihon-u.ac.jp / nomura.kenta@nihon-u.ac.jp

(おくのくにとし/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

(いな しんすけ/映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)

第40回映画文献資料研究会のお知らせ

日本映像学会映画文献資料研究会では、下記のように研究例会を開催いたします。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

記

「山本喜久男著『日本映画におけるテキスト連関 映画史研究』
出版について」

日本における比較映画史研究の泰斗・山本喜久男氏がこの世を去って16年目の今年、氏の遺稿集『日本映画におけるテキスト連関 比較映画史研究』がようやく刊行されました。本書は、逝去の直前まで書き綴られてきた未刊行の論文を集成したもので、文部大臣賞受賞の先行書『日本における外国映画の影響 比較映画史研究』(1983)の続編ともいべき性格をもつ、日本映画研究上の重要な著作といえるでしょう。しかし遺稿集の出版化作業では、予期せぬさまざまな問題が起こるのが通例です。今回は、論文の整理に携わった編集者という立場から本書完成までの経緯や具体的作業について発表します。

日 時：2016年7月16日(土) 15:00～17:00

会 場：東京工芸大学芸術学部1号館1101教室

東京都中野区本町2-9-5

発表者：奥村賢会員 (いわき明星大学教授)

佐崎順昭会員 (東京国立近代美術館フィルムセンター)

参加費：無料 (例会の後に、有志による懇談会を予定しています。)

主 催：日本映像学会文献資料研究会 (代表：西村安弘)

問合先：nishimur@img.t-kougei.ac.jp

※ご来場の際は、1号館入り口の警備室で、入場証をお受け取り下さい。

研究企画委員会

委員長 齊藤 綾子

研究企画委員会では、今年度第1回研究企画委員会が以下のように開催されました。ここでは委員会報告とその後の対応についても併せて報告します。

日時：2016年5月8日（日）13時半～14時半

場所：日本大学芸術学部 南棟4階S-402教室

出席：齊藤綾子、奥野邦利、太田曜、大橋勝、草原真知子、黒岩俊哉、瀧健太郎、村山匡一郎

議題

1) 2015年度活動費助成報告について

2015年度に研究会活動費助成を支給した研究会より提出のあった各種報告書類の内容を確認した。2016年度からは研究企画委員会が示すガイドライン※に沿った定型の予算書・決算書の提出を求めている。

また、活動報告については研究企画委員会でチェックする方針だが、これについては助成の有無にかかわらず、映像学会所属の全ての研究会に求める方針を確認した。基本的には研究会ごとに会報での報告は行われているので、概要／実施日／参加人数などの最低限の情報提出を求めたい。

※＜ガイドライン＞

- 1、映像学会の研究会活動であるということをよく認識したうえで、研究テーマにある程度普遍性、広がりがあること
- 2、研究会の運営が特定の個人に偏りすぎず、多くの会員の参加と交流が見込まれること
- 3、研究会の継続性が担保されるよう運営委員のバランスを考慮したものであること
- 4、事前に研究会活動に準じたような実績がない場合には、研究テーマが想定する専門性や業績を持った会員が運営構成員に含まれていること

2) 活動費チェック体制について

研究会活動費助成における決算報告は、総務委員会でチェックすることを理事会へ改めて提案した。

3) 2016年度新規登録について

2016年度（春期）を4月末に締め切った。今回は「ショートフィルム研究会」の運営構成員変更のみ申請され、承認された。

4) 2016年度活動費助成申請について

2015年度を3月末に締め切った。申請は以下の4件。

- 1、「アナログメディア研究会」（15万円）
- 2、「ビデオアート研究会」（8万円）
- 3、「関西支部夏期映画ゼミナール」（8万円）
- 4、「ショートフィルム研究会」（15万円）

研究企画委員会での審議の結果、1・2・3・4を助成対象として同日の合同理事会に内申し、承認された。

5) その他の課題について

- ・総務委員会による学会HPリニューアルを足掛かりに、研究会活動の情報共有が進むよう協力をする方針を確認した。
- ・会員による研究発表の機会充実については、今後も課題として検討を続ける。

報告と計画については以上ですが、今期の研究企画委員会はその任務を終了し、次期委員会にバトンタッチとなります。今期の研究企画委員会では、大きく2つの点についてそれなりの形を整えることが出来たのではないかと思います。

第一に、前期の委員会から引き継いだ研究会の助成金制度の運用が本格的になり、申請、活動報告などさまざまな書類を精緻化し、フォーマット化を進め、今後の研究会運営がよりスムーズに進むための一助となり、また次期研究企画委員会でさらに充実が図られることを期待しております。

第二に、大会発表の一次審査を研究企画委員会で引き受けることで、理事会、さらに大会実行委員会との連携が進み、こちらも大会準備をスムーズにするだけでなく、大会発表の質向上に貢献することが出来たのではないかと思います。今期の研究企画委員会メンバーに継続委員が残ることで、今委員会で培ったノウハウを継承することが出来ればと思います。

最後に、武田会長、そして積極的、かつ協力的に委員会活動に参加して下さった委員会メンバーの方々、とりわけ副委員長で全体を常に把握し、煩雑な実務を一手に引き受けて下さった奥野理事に心からお礼を申し上げます。また、いつも影ながら学会活動を支えて下さっている事務局にも感謝します。

以上

（さいとう あやこ／第21期研究企画委員長、明治学院大学文学部）

フォーラム

■特定研究員公募のお知らせ 東京国立近代美術館フィルムセンター

独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、以下の要領で、「特定研究員（特定有期雇用職員）」を公募しています。

<http://www.momat.go.jp/ge/jobs/>

1. 雇用予定期間 平成28年9月1日～平成31年8月31日
(実績に応じて最大5年まで更新することがある)
(採用日については応相談)
2. 職名 特定研究員
3. 職務内容
(1) 映画フィルム、映画関連文献及び資料の収集、整理、保存、公開、展示及びこれらに関連する業務
(2) 映画にかかわるさまざまな教育・普及プログラムの開発や運営業務
4. 採用人数 1名
5. 応募資格
(1) 大学または大学院において映画（映像を含む）、映画史、映画教育、映画マネージメントなど、映画に関連した分野を専攻または研究した者で、大学院修了（修士）以上またはこれと同等以上の専門知識、経験を有する者。
(2) 映画にかかわるさまざまな教育・普及プログラムの開発や運営に積極的な姿勢をもって取り組むことができる者。
(3) 映画・映像に関する教育やワークショップの運営に携わった経験がある者が望ましい。
6. 勤務条件等
(1) 勤務日及び勤務時間
週5日 38時間45分（火曜日～土曜日）
1日7時間45分（10:00～18:45 休憩時間60分）
※ 勤務日及び勤務時間については、相談のうえ変更する場合があります。
(2) 勤務場所 東京国立近代美術館フィルムセンター
東京都中央区京橋3-7-6
(3) 給与等
○独立行政法人国立美術館特定有期雇用職員の就業に関する規則による
(4) 加入保険等 国家公務員共済組合理険・雇用保険・労災保険
7. 選考方法
(1) 第1次選考 書類審査
※ 第1次選考後、合格者へのみ第2次選考の詳細をご連絡します。
(2) 第2次選考 面接試験 平成28年7月下旬に実施予定
8. 応募書類
(1) 履歴書（自筆・写真貼付）
(2) 業績調書（別紙様式1：<http://www.momat.go.jp/ge/wp-content/uploads/sites/2/2015/01/89a61d8ach10137244b678fea6573a6a.doc>）
(3) 映画に関する教育・普及プログラムの開発や運営に対する抱負（A4 縦紙、横書き 2000 字程度・所定様式なし）
※電話番号及び常用のメールアドレスを必ず記入してください。
※備考欄又は余白に「特定研究員公募」と朱書記入してください。
※履歴書・業績調書に、応募資格（1）から（3）に関連する事項を簡潔に必ず記入してください。
※応募書類は返却しません。今回の公募目的以外には一切使用せず、責任を持って廃棄いたしますのでご了承ください。
9. 応募締切 平成28年7月14日（木）17:00 必着
10. 問い合わせ先
独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館フィルムセンター業務担当係 荒井 E-mail : nfc-gyomu@momat.go.jp
(お問合せは、原則として電子メールでお願いいたします。)
TEL 03-3561-0823
(電話による問い合わせは、祝日を除く火曜日～土曜日 10:00～18:00 のみ)

以上

編集後記

総務委員会

■最近の学生からの質問でよくあるのが、「先生、町中で撮影したいのですが、勝手にそこにいる人を撮っていいんでしょうか?」「お店の看板が写り込む時は許可が必要ですか?」などなど。10年くらい前まではこんなことを聞いてくる学生はほとんどいなかったし、注意されたら丁寧に謝れば良かったらう。しかしこの問いにどう答えるか、最近はちょっと悩んでしまう。「コンプライアンス」に基づく行動やシステム作りが企業や大学にも強く求められる現在、道徳に反するようなヤバイことは未然に防ぐという考え方は確かに正しい。が、あまりに自制心が働きすぎ、一線を越えられない発想で止まるつまらなさを全般的に感じる。港千尋さんは私たちが学生に口ごもってしまうのは「恐怖心」が我々の中にあるからだと言った。うーん、なんだか怖くなってきた。(伊藤)

■ショートショートフィルムフェスティバル & アジア大阪2016 (後援) 開催日程:2016年9月17日(土)～19日(月・祝)、24日(土)、25日(日)

開催会場:ナレッジシアター

(グランフロント大阪 北館ナレッジキャピタル 4F)

料金:無料 ※8月1日(月)よりWeb予約開始予定

主催:一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社KMO

企画・統括:ショートショート実行委員会

協賛:未定

協力:MBS、大阪ドイツ文化センター 他(予定含む)

後援:大阪府、大阪市、公益社団法人関西経済連合会、一般社団法人関西経済同友会、大阪商工会議所、公益財団法人関西・大阪21世紀協会、日本映像学会、NPO法人映像産業振興機構、一般社団法人デジタルメディア協会、アンスティチュ・フランセ関西、イタリア文化会館、FM OSAKA、FM802、FM COCOLO 他(予定含む)

大阪の独自プログラム

大阪独自のスペシャル企画でショートフィルムを体験!
満喫度がアップする、多彩なプログラムやイベントをご用意!

詳細は7月22日(金)頃更新予定。
<http://kc-i.jp/activity/shortshorts/2016/>



SHORT SHORTS FILM FESTIVAL & ASIA とは?

米国アカデミー賞公認、日本発・アジア最大級の国際短編映画祭。新しい映像ジャンルとして「ショートフィルム」を日本に紹介するため、米国俳優協会(SAG)の会員でもある俳優の別所哲也が創立。1999年に東京・原宿で誕生しました。初年度は映画『スターウォーズ』で有名なジョージ・ルーカス監督の学生時代のショートフィルムも6作品上映し、その後も毎年応援の声をいただいています。2001年には「ショートショートフィルムフェスティバル(SSFF)」と名称を改め、2004年には米国アカデミー賞公認映画祭として認定されました。これにより、映画祭のグランプリ作品が、次年度のアカデミー賞短編部門のノミネート選考対象になり、日本からオスカー像を手にする若手が出現する可能性への架け橋ができました。また、アジア発の新しい映像文化の発信・新進若手映像作家の育成目的から、同年に「ショートショートフィルムフェスティバル アジア(SSFF AISA 共催:東京都)」が誕生。現在、この2つの映画祭が「SSFF & ASIA」として開催されています。上映内容は、オフィシャルコンペティションをはじめ、「音楽」「環境」「CGアニメーション」など、様々なカテゴリーのプログラムで構成されています。

SSFF & ASIA 2016 テーマ Cinema Carnival ~ Explore Your Emotions ~

4年後の2020年、湧き上がる日本の姿が目に見えます。世界各国から選りすぐった多種多様なショートフィルムが、それぞれの色を鮮やかに表現するSSFF & ASIA。今年は、観る者の感情奥深くに分け入るような、映像の豊かな実りを味わう映画祭が、熱く祝祭的な「お祭り」であることを再定義します。映画体験という非日常のお祭りが、日常をより穏やかにエキサイティングにも、愉快にもすることを体験してください。

以上